
悲しきアウトサイダー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しきアウトサイダー

【Nコード】

N2811G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

お嬢様育ちの彼女と付き合っていたが彼女の兄にそのことをつっぱねられた不良あがりの若者のいたたまれない気持ち。チェッカーズシリーズ第三十八弾、アルバム『フラワー』にあった曲です。

第一章

悲しきアウトサイダー

「御前はどうしようもない馬鹿だ」
いきなりこう言われた。

「高校も満足に出ていないんだったよな」

「それは……」

「そうだな」

電話の向こうの声はもう話し合いさえできないものだった。そんなものは向こうから完全に打ち切っていた。今まで頭のおかしい話し合いもまともにできねえ狂った奴等に出会って損なのは片っ端から殴り飛ばして話を終わらせてきたが今は違った。向こうは完全に俺を決め付けてきていた。

「そんな奴に妹をやるか」

続いてこう言われた。

「二度と電話をかけるな。いいな」

最後にこう言われて電話を切られた。それで終わりだった。電話を一方的に切られた俺は。まずは家の電話機を思いきり叩き付けた。
「くそっ！」

「おい、駄目だったのか!？」

「それじゃあやっぱり」

「ああ……」

後ろにいるツレ達に背を向けて答えた。答えながら背中を丸めていた。

「駄目だったぜ。無茶苦茶言われたさ」

「……そうか」

「わかってたけれどな」

オイルと汗の匂いにするバイク屋。俺達が七人でやってる店だ。当然俺もここにいます。肩書きは一応は専務だ。その専務様が肩丸め

る破目になっちまった。涙こらえるだけで必死だった。

「気落とすなよ」

「・・・・・・・・なあ」

皆俺の後ろから慰めの声をかけてくれる。ずっと一緒だった奴等だ。その心は痛い程よくわかった。

「ちょっと飲みに行こうぜ」

「そうだよ。あの店行こうぜ、あの店」

「俺達のおごりでな」

「・・・・・・・・悪いな」

ここで断ったらかえって駄目なのはわかってた。俺にとっても。こいつ等の心がよくわかった。俺は仲間の心を無碍にはするつもりはなかったしできなかった。だから誘いを受けた。

「あの店だよな」

「ああ、あの袋小路のな」

「吹き溜まりの店さ、あの」

俺達がよく行く店だ。一見目立たないがそれでも安くて美味くて店のおっさんとおばさんが愛想よくて。それでよく行く店になっていた。

「そこでどうだ？」

「何なら別の店もあるけれどな」

「いや、あそこ行こうぜ」

俺はその店でいいと思った。背中を向けたまま頷いてそれに応えた。

「あそこで。皆で飲もうか」

「ああ、そうしようぜ」

「七人でな」

「仕事も丁度今終わったしな」

俺はここで皆の方を振り返った。何とか涙は我慢したので振り返ることができた。けれど笑顔はかなり無理していたと自分では思う。

「で、何飲む？」

「飲むのは決まってるさ」

社長やってるリーダーが言ってきた。

「ビールだよ、ビール」

「やっぱそれか」

「それかチューハイ、サワーだな」

「おいおい、何かいつもと同じだな」

俺はリーダーの言葉に思わず苦笑いした。この苦笑いもかなり作ったものだったにしろ。

「またそうだったのかよ」

「美味いだろ？」

リーダーは素っ気無く俺に言葉を返してきた。

「ビールもチューハイも。じゃあ御前は飲まないのかよ」

「いや」

それはすぐに否定した。そういった酒は俺も大好きだ。

「飲むぜ。気分よくな」

「そうこなくっちゃな」

「じゃあ今から行くか」

「そうだな。戸締りしてな」

「何だかんだで金はあるからな」

「少しだけれどな」

七人で笑いながら言い合う。会社は会社でも七人だけでやってるしがないバイクの修理工場だ。ダウンタウンのろくでなし共を相手にしている店だ。お世辞にもガラのいい店じゃない。それでも俺達はこの店で油と汗にまみれて必死にやっていた。確かに高校も碌に言っていないとお情けで卒業させてもらったチンピラの集まりだ。それでも俺達はこの店に誇りを持っているし真面目にやっている。けれどあいつの兄貴はそんなのを見ようとしなかった。

「行くぜ」

メンバーの中で一番背の高いのが俺に声をかけてきた。
「七人でな」

「そうだな。七人でな」

「今から行くと飲み放題だぜ」

一番のチビが笑ってきた。こいつが一番飲む。

「安い酒をこれでもかってな」

「今日は飲むぜ」

俺はそいつに言ってやった。そいつだけじゃなくて仲間全員に。

そんなやり取りの後でその店に行った。店に入ると早速七人でテール囲んで派手に飲みだした。俺は途中で言った。言ってやった。

「だからよ」

「何？」

チビの弟が俺に伝えてきた。こいつも兄貴に負けず劣らず飲む。

第二章

「そんなに偉いのかい？ 白い襟のシャツ着て髪型もきちんと七三分けにしているのがよ」

俺は酒の勢いでこう言った。

「それでケース持ってネクタイ締めて。あの坂上のマンションに住んでよ」

「それがエリートなんだろうね」

色白の奴が俯き気味に俺に答えてくれた。

「何だかんだでさ」

「エリート！？ へっ」

下らない言葉だ。本気で思った。

「何だよ、そんなの全然凄かねえんだよ。どうせいい大学とか出ただけじゃねえかよ」

「まあまあ」

細目に宥められた。メンバーの中じゃお笑い系だ。

「落ち着いてさ。飲もうよ」

「ああ、悪いな」

細目に言われて落ち着きを取り戻した。そのうえでまたビールを一杯飲んだ。

「何かな、ついついな」

「そっから先は言うな」

リーダーに真顔で止められた。

「言ったら御前が惨めになるだけだぞ」

「そうか」

「そうだ。俺達は俺達だ」

その真顔で俺に言ってくれた。

「じゃあそれでいいじゃないか。そうだろう？」

「俺は今のままでいいんだ」

これは俺の偽らない本音だった。

「バイクいじってな。いい仕事だろ？」

「仕事に良し悪しなんかないだろ」

ノッポの言葉だった。チームの中じゃリーダーの次にしっかりしてる奴だ。

「そんなのよ。違うか？」

「だから。俺はそう言ってるだろ」

ノッポに言葉を返しながらまた飲んだ。食い物も適当に皆食ってる。

「どんな仕事でもよ。真面目にやってりゃよ」

「あの坂の上の世界なんて碌なものじゃねえぜ」

チビはそれがわかってるみたいだった。

「あんな所にいるよりずっとこのダウンタウンにいた方がいいさ。あそこは外見だけ奇麗でもその中身はとんでもなく汚いところさ」

「何処でも汚いさ」

俺は奇麗な世の中なんてないと思ってる。何処もかしこも汚い。人間なんて色々ある。だから完全に奇麗な世の中なんて夢の中だけだと思っている。今もだ。

「けれどよ、汚いふうに思われるのはな」

「だからさ。それ言わないでおこうよ」

チビの弟にまた言われた。

「楽しく飲んでさ」

「楽しくかよ」

「チヂミ来たよ」

色白が追加メニューを教えてきた。

「あと角煮も。来てるよ」

「あっ、いいな」

どっちも俺の好物だった。酒もそうだったのも好きだ。

「じゃあそれもらうか」

「まだどんどん来るから」

細目はこう言ってにこにこ笑ってきてくれた。

「どんどん飲もうよ」

「そうだな、飲むのみな」

俺もそれに乗ることにした。

「まだまだ時間もあるしな」

「ああ、そうだよ」

「だから飲もうぜ」

「ああ」

仲間達の言葉に応えた。

「ビールどんどん持って来てくれ」

「よしっ」

「ほらっ」

大ジョッキがどんどん来た。飲み放題だから皆強気だ。

「チューハイもあるぜ」

「普通の酒もな」

「飽きるまで飲むぜ」

今日はとことんやるつもりだった。こんな時はいつもこうして皆でやる。それがいいか悪いかなんてのはどうでもいい。とにかくこうやっていつも忘れている。

第三章

「それこそ朝までな」

「そりゃ明日の仕事につかえるだろうが」

「まあそうだけれどな」

「どうしても飲むっていうんならな」

「この後か朝に酒を抜け」

仲間達に言われた。酒が残っていて流石に仕事にはならない。俺でもそれはわかっていたしこの時は本気でこの後か朝にでもサウナなり走るなりして酒を抜くつもりだった。ところが急に。それをする必要もなくなった。

「ここだったんだ、やっぱり」

「んっ!？」

女の声で顔をあげるとそこにいたのは。何とあいつだった。白いワンピースのお嬢様そのままの格好のあいつが。よりによってこれ以上はないって立場違いなこの場所に顔を出してきていた。俺はあいつの姿を見て。酔いが一気に醒めた。もう酒どころじゃなかった。

「何で御前がここに」

「探したの」

こう言ってきた。静かに。

「まさかとは思ったけれど」

「飲む場所は色々あるけれどな」

「けれどここが一番のお気に入りって言ってたじゃない」

「それでここに來たのか」

「話、聞いたわ」

今度はこう言うのだった。俺と兄貴との話なのがわかる。

「御免なさい、兄さんって」

「気にしちゃいないさ」

ここで言った言葉は嘘だった。

「全然な。だから忘れろよ」

「嘘、忘れられる筈ないじゃない」

「……まあ座れよ」

ずっと立ったままだったのを見て声をかけた。とりあえず座らせてからそれからまた話をしたかった。俺なりに気を使った。すると仲間達が席を一つ用意してくれた。

「これでいいかな」

「すみません」

「礼ならいいってことよ」

仲間達は笑って彼女に応えた。

「そんなのはな。まあ話になって」

「俺達は俺達で飲んでるからよ」

「気を使ってくれてるのか？」

「いや、別に」

笑ってそれは否定する奴等だった。

「ただ席がたまたまあっただけさ」

「気にするなよ」

「気にするなか」

「ほら、だから話しとけて」

「俺達は勝手にやるからさ」

「悪いな」

その心を受けることにした。その間に彼女は俺の向かいに用意されたその席に座ってきた。白いワンピースが何処までも眩しかった。

「兄さん、かなり酷いこと言ったらしいわね」

「別に」

今は飲まずに応えた。

「そんなことないさ。ちょっと世間話しただけさ」

「嘘、兄さん言ってたわ」

今の言葉はすぐに駄目だしされた。やっぱり嘘は通じなかった。
「あんな奴と付き合うなって。そこまで」

「へっ、全部御存知のつもりか？」

「言ったわ、そんな人じゃないって」

俺のことだ。

「けれど、全然」

「聞かねえってんだろ。どうせよ」

「ええ、もう。何があってもって感じで」

「どうせよ。俺はどうしようもねえワルさ」

昔はそうだった。七人で好き勝手やってきた。そんな俺を今更よく思う奴なんているとは思っちゃいない。けれどこいつに出会って変わって会社もはじめて。マジでやってきたつもりだったけれどそれは変わっちゃいなかった。所詮俺はアウトサイダーだったってわけだ。

第四章

「それは本当のことだからな」

「それでいいの？」

「いいさ」

ビールを一杯飲んだが全然味がしなかった。ついでに言えば酔いもしなかった。全く酔うことがなかった。

「最初からわかってたんだよ」

「わかってたって？」

「俺は生まれも育ちもダウンタウンさ」

それは変わらない。俺はダウンタウンで生まれて生きてずっとこうしてきた。けれどこいつは全然違う。生まれも育ちも坂の上で。本当のお嬢様だ。俺とは全然違う。

「御前は坂の上。世界が違うんだよ」

「世界が違うって」

「夢だったんだよ」

今度俺の口から出たのは夢だった。

「けれどな、やっぱり夢は夢だったんだよ」

「夢なのね」

「あばよ」

言いたくなかった。けれど言うしかなかった。どうせ最初から無理だった。自分で自分に言い聞かせた言葉だったがそれが現実だった。

「お別れだ。あの兄貴のところに帰りな」

「私は、それは……」

「俺は所詮ダウンタウンさ」

諦めの言葉だった。

「御前は坂の上。そうだろ？」

「だから駄目なのね」

「どうしようもねえんだよ」

殆ど俺に言い聞かせた言葉だった。

「結局な。だからよ」

「お別れなのね」

「そうさ、終わりなんだよ」

また言っでやった。

「これでな。あばよ」

「………わかったわ」

俯いて答えてきた。

「それじゃあ」

俯いたまま席を立って帰っていった。俺は黙ってそれを見送った。それだけだった。後はもう飲むだけだった。またビールのジョッキを手に取った。そこに仲間達が来た。

「あれでいいんだな」

「納得してるんだな」

「………納得させるさ」

俺は言っでやった。飲みながらやっぱり味がしない。

「俺にな」

「そうか、わかった」

「それならな」

「ああ、いいんだよ」

早速俺自身に納得させた。

「これでな。所詮俺達はアウトサイダーだ」

「それはな。アウトサイダーさ」

「七人だけで生きてるな」

「それでいいんだよ」

本音の言葉を出してやった。

「アウトサイダーでな。それでいいんだよ」

「そうか」

「ああ」

これだけ言ってまた飲みだした。とにかく何の味もしない酒だった。けれどまた飲みだした。憂さ晴らしに。所詮はアウトサイダー、俺達にお似合いの道がある。そう自分自身に言い聞かせて飲んで仲間と一緒に騒いで。それで終わらせてやった。悲しみなんて無理にでも忘れてやった。終わらせる為に。

哀しきアウトサイダー

完

2008・8・21

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2811g/>

悲しきアウトサイダー

2010年10月8日15時49分発行